

明木茂夫著

中国地名カタカナ表記の研究

教科書・地図帳・そして国語審議会

（東方書店、二〇一四年三月、四五四頁）

その昔、『若きウエルテルの悩み』を著した Goethe (1749-1832) を原音に近いカタカナで綴ろうと、涙ぐましいまでの努力を重ねた結果、日本人は何通りにも及ぶ表記方法を思いつく。かくて「ギョエテは俺のことかとゲーテいい」という戯れ歌が生まれたらしい。なぜ、そこまでカタカナ表記に拘り、縛られるのか。

たとえば中国人の名前だが、カタカナで無理やり表記したところで何の意味があるのか。毛沢東は「マオ・ツートン」でも「マオ・ズートン」でもない。おそらくカタカナで原音に近い表記が可能な唯一の人物といえ、不世出の京劇役者で知られる梅蘭芳（メイ・ランファン）ぐらいだろう。だが、それとても日本語の「ン」が

終わる以上、正確には「芳」(Fang) は「ファン」ではないはずだ。そもそもカナで外国の人名や地名を原音に近い形で表記することは可能だろうか。著者は、「二十年も前のことだが、

ひよんなことから高校用の社会科地図帳を手に入れた。さて中国のページを開いてみたところ、最初に目に飛び込んできたのが他ならぬ「ター運河」の文字だったのである。何だこりゃ？ 爆笑したことはいうまでもない。他にも「万里長城」が「ワンリー長城」となっている。わはははは！〔中略〕「敦煌」が「ツンホワン」、「洞庭湖」が「トンチン湖」など、違和感は否めない」と、本書を軽いタツチで書き始めてはいるが、どうしてどうして、著者の提起する問題は極めて重い。いや重すぎる。ある時、著者は今の学生は中国の地名をどのように教わってきたのかを知ろうと、尋ねる。すると、「大多数の学生は、普通の読み方で習いましたと言っていたのだが、驚くべきことに、カタカナで習いました」と。カタカナ

書きでなければ正解ではない。カタカナ綴りが些かでも違えばバツ。現地の人を読み方に合わせなければ失礼だと指導された——このように「教えてくれた学生が少なからずいたのである」。

「それ、いいんだろうか……。」と思いついた著者の研究は、教科書・地図帳・指導書の中国地名表記（第一章）を手始めに、国語審議会と文部省の文献（第二章）と戦前の文献（第三章）の分析を経て現代のカタカナ表記を巡る問題（第四章）にたどり着き、勢いのままに韓国語とタイ語における中国地名表記（附論）にまで発展する。

地図帳における中国地名のカタカナ表記は「昨今言われるような国際化とは直接関係ないらしい」。では「一体いつ、誰が、何のために始めたものなのだろうか」と、著者は問う。

精緻な研究書ではあるが、上質なミステリー小説を思わせる文体とストーリー展開によって、いつしか読者は、著者の目指す学術研究の深淵な世界に誘い込まれていくはずだ。（樋泉克夫）